

---

# バリ鉄ガール

雨笠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
バリ鉄ガール

【Nコード】  
N3533V

【作者名】  
雨笠

【あらすじ】  
掛山 明はバリ鉄の女性。休日には電車に乗って旅するほど。

そしてただ単に『電車が好きだから』と言う理由で鉄道会社に就職した。

高校のときは、鉄道職の専門学校には行かなかった。しばしは、普通の生活をしていたかったからだ。  
同じ女子高生のように、帰りに寄り道して、楽しい生活を送りたい

と思っていた。彼女はとにかく堅苦しい事は嫌いであった。だが、鉄道員になることは、諦めていなかった。女性の男性に負けないくらいの活気を見せるために。

高校卒業時には、近くの大学へ入り、鉄道についても猛勉強した。ここまでできたらもう引き返せないと彼女は思っていた。そしてついに、鉄道会社に就職できた。人気の職種だけあって、かなりの人数が面接を受けていたようだ。

見事就職した彼女は、これからアタフタな毎日を過ごし始める。ちよつとだけ面白い日々を、ちよつとだけ面白い仲間達と、ちよつとだけグダグダで過ごしていく鉄道員の日々、  
今日も出発進行です。

## 猛暑の出勤（前書き）

いきなり始まった新作。

毎回「面白いの作ります！」とって面白くなく挫折することが、何回もありました。

だが挑戦しまくるのが自分のタチなので（単なるアホですね（笑）

今回は上手く行ってほしいと（面白くしよう）と  
（思います）

自信はないのですが・・・！頑張ります・・・。

## 猛暑の出勤

夏。

太陽がジリジリと照り付ける朝7時……。

目覚まし時計がなる。

「ん……」一人の女性がベッドから起き上がる。

名前は掛山<sup>かけやま</sup>明<sup>あき</sup>23歳。

今春からアパートで一人暮らしを始めた、それは

Japan trip train. 通称JTTという鉄道会社に就職したからである。

日本で一番大きい鉄道会社で、

北海道地方、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方、四国地方、九州地方に分かれている。

出勤は朝の9時。最寄の明佐間駅で働いている。新幹線の運転手を目指して日々精進しているのだが、道のりは遠い。

そしてJTTに就職した根本的な理由は『電車が好きだから』である。そのため休日も度々近くを走っている電車を見に行くことも、電車に乗って旅に出ることもある。

朝ごはんはトーストしたパン。意外と小食。

友達からメールが来た。

ケータイを開いてみる。すると、  
『奢って（何でも）』明は一瞬理解しにくかったが、何でも良いから奢ってほしいのだけは分かった。

『イヤだ』と返信した。

20秒したらメールが返ってきた。

「はやっ」っと少し驚いた明、メールを見ると、

『じゃあ奢って（ネッ）』

「何が言いたいのよ……。」と呟いて、

『あまあまああま』と送った。

これで明きはもう奢る話は誤魔化せただろうと思った。

すると40秒後、

『梅雨梅雨梅雨梅雨梅雨』と返ってきた。

明は「単純すぎっ……。」と言って「ププツ」と笑った。

明きは『じゃあまた後でね』と打って話を終わらせようとした……だが10秒後。

「はやっ！」メールを見てみると、

『じゃあ奢ってねー（可決）』

「くっ……！」

そして午前8時30分。明は出勤のため家を出た。

実はメールの相手は向かいのアパートに住んでいる。

名前は竹内<sup>たけうち</sup> 里佳<sup>りか</sup> 23歳。

何かと適当で、JTTには明の一ヶ月後に入社した。そのため2人はお互いのことをまだ深く知り合っていないので、たまに会話がズレる。

メールの本文の最後に何かと（ ）を付けて言葉を付け加えるのがクセ。適当性。

そんなぐらい。（少々略）

「おーっ、あつきおはよう」と里佳が言う。

「りっかおはよう」と返す明。

2人はあだ名で呼び合っていて、あきの中に『っ』を付けてあつき。りかの中に『っ』を付けてりっか。すべて適当な里佳が考えたもの。

「あ、約束。奢るって言ったよね？」

「あーそうだね。何でも良いなら近くの自販機でなんか買ってあげるけど。」

「おーサンキュー」と言っつて、自販機の前で立ち止まる。

里佳が、

「あっ、自販機叩いてみたら？何か出るかワクワクしない？」と言っつた。明きは（ん〜）といった顔で、

「良いけど、こんな暑いときにコーヒー出ても知らないよ？スポーツドリンクとかお茶の方が無難だよ。」と忠告をしておいた。

里佳は、

「楽しければ良いんだよー。」「とニコニコしながら言った。適当性

の本領発揮である。

明きはお金を入れて自販機を叩いてみた。

（ガタン）と音を立てて出てきたものは、

コーヒーであった。（無糖）

「あー、コーヒーかー。コーヒーは嫌いじゃないけど無糖かー。」  
とちよつと残念そう。

「だから忠告したのに。」

すると里佳は閃いた。

「あつ、あつきも叩いてみてよ。ジュース出てくるかもよ、甘った  
るいの。フフフツ」と意地悪な提案。だが意外と適当性の明も、

「やってみますか・・・」（ドンツ）

（ガタツ）またまた音を立てて出た商品は、

コーヒーであった。（牛乳入り、糖分3倍）

「・・・。」

「・・・。」

2人は黙った。

里佳

「もう・・・行こうか・・・。」

明

「うん・・・。」



午前8時55分。

里佳が、

「いやー、しかし駅構内は涼しいねー。」と言った。明きは、

「だねー。本当今日は暑いよ。」

里佳「何度あるのかね？」

明「えつと今日の明佐間市の気温は・・・おわつ、37。猛暑だねこりゃ。」

里佳「キヤー、今日は汗かくなあ。」

明「まあラッシュがひどければねえー。」

と、何気ない会話をして更衣室に入った。

午前9時15分。

更衣室から出る2人。仕事になるとキリツと変わる。適当性の里佳も少しは真面目になる。

意外にも2人ともケジメがしっかりできる人間。

まず前任者と忘れ物や金銭の帳簿などの引継が行われ、その日のシフトに合わせて改札や自動券売機の実管理などが行われる。

「えーつと、あ、今日月曜か。」里佳がシフトを合わせながら言った。昨日、明たちは休日だった。

「あ、私もすっかり忘れてた。」

「えー、なっおも忘れてたのかー。」と明が言う。

「うん、多分休みボケ。」と話す女性。

名前は渡部わたべ 奈麻なま23歳。

明の三ヶ月先に入社していた。仕事は真面目、プライベートはグダグダ。仕事はできる範囲までこなすタイプ。範

困外だったら諦める。

分かりやすい人。

もちろんあだ名は『なっお』こちらも適當性の里佳が付けたもの。

そして里佳はシフト合わせを終えた。

3人はしばらく窓口で相談を受けたりする。

午前9時50分。

ホーム立碇をしていた人が戻ってくる。次は明達の番である。

掛山市はベッドタウンのため、時間が経っても何回かラッシュがある。

だが最近掛山も発展してきている。その証拠である。

3人は悪夢のラッシュ時のホーム立碇をすることになった。

## 猛暑の出勤（後書き）

まあ1話1話1000文字前後という、  
短いものになると思いますが、

それだけ話の展開が多いということ（プラス思考で（笑）  
期待しなくても構わないので騙されたと思って読んでみてください  
ね。

## ホーム立碇（前書き）

というわけで大い2話なのですが。（2話と言っても話の展開が変わるぐらいですが。）

この小説、終わったわけではないのですよ（笑

自分がヘタレなだけなので。（言い訳すると忙しかったので）  
今回もゆるっとやっています。

## ホーム立硝

「あつっ！」明が言うと、まるで当たり前のように視線を理佳に移し、

「変わってよ〜」と言った。理佳は「やだよ〜、ベストポジションなんだから〜」と、日陰の屋根の下で涼しい顔をして言い返す。

明「やだよ〜、何でここ屋根ないのよ〜」

理佳「知らないよ〜、取り敢えず譲らないからな〜」

明「これつてある意味イタズラだろ〜」

理佳「知らないよ〜、ホーム作った会社に言えよ〜」

明「やだよ〜、面倒くさいよ〜」

理佳「やーい、意気地なし〜」

明「ああ？ナメてんのかワリヤアア!？」

理佳「人様に向かってその口の利き方はなんだだあ!？」

明「噛んでるじゃあねえかあ!？」

理佳「これはネタだわあ！」と理佳は赤面した。

そんな子供みたいな応酬が続いていると。

「もうすぐ乗客来るから静かにしたら？」と奈麻が言った。

すると理佳が口を開いて「まおりんは大人だな〜、真面目過ぎない？」と、すこしむすつとした顔で言った。

奈麻は「『まおりん』って、あだ名変わったの・・・？まあそりゃ倍率高い職業だったんだし、入ったからにはしっかりやらないと。」と、理佳の言い分をまるで江戸時代のエリート侍のように一刀両断した。

明も「そうだよ、仕事はしっかりやって、OFFのときに思いっきりだらければ良いじゃん。」と、奈麻と明の“バンド”のような『意見』で、時間がたって腐ったまま放置された『理佳の質問』と言う名の“具”を挟んだ。

理佳は白い手袋を外して、頭の上に揚げ、左右に振って降参した。

しばらくすると徐々に仕事場へ早く向かおうと言わんばかりにホームに人が流れ込んできた。

すると、まるで人が来るのを待っていたかのように、電車がホームにゆっくりと入線してきた。

すでに人が多く乗っているため、明達はテレビでもよく見る“アレ”をやらなければならない事を目を合わせてコクリと頷いて覚悟した。

電車のドアが開く、それと同時に明達のためも見開く。

(あ、あそこ詰まるな。)と明は予測した。それは階段の近く。こちら辺に人が多いのは降りる時も、ちょうどその階段がある近辺に電車がとまるからである。つまり皆急いでいる。

明は階段の近くで様子を伺う、後ろから理佳もやってきた。理佳はまるで誰かと戦っている様な顔をしている。

明は「なにもそんな本気にならんでも・・・」とあきれた顔で言った。

理佳は「大漁だな・・・」と目を細めていった。明も返すのが面倒になった。

そしてついに詰まった、あと数十人が入れていない。

そして車掌も発車メロディのボタンを押しながら（押しして押しして）、手で合図を送ってくる。

そして同じようにホーム立碇をしていた上司の宮間<sup>みやま</sup> 昭好<sup>あきよし</sup>も来た。

上司と言っても27歳で、外見からするとちよつとイケメンだが、実は面倒くさがりで、時々他人任せだったりする。

性格も直せば文句なしの人間。だが力持ち。その力は意外なところで発揮される。

宮間は「車内中程までお詰めください！」と言い、続けて「失礼します」と、まるで腰の低すぎるセールスマンのような申し訳なさそうな口調で一言断り、サラリーマンの男性を押しす。

明と奈麻も押すが、一人だけサボっている人がいる。

そう、理佳である。

サボリといっても、人を押すスペースが無いだけで、ただただ見守る事しかできない。つまり目立つ場所がない脇役状態。

そして3人は何とか力づくではみ出していた数十人の乗客を車内に収容することができた。とてもきつそうだ。

宮間が「ドア閉まります、ご注意ください」と押し込んだ乗客に注意をして、指差喚呼をした。

駆け込み乗車が無いのを確認して、宮間は出発準備完了を知らせる赤い旗を頭の上に高々と掲げた。

車掌も指差喚呼をして早めにドアを閉めた。

電車は逃げるようにしてフルノッチで加速する。勇ましいモーター

音と共に赤いテールランプを見せつけ、段々とそのシルエットを小さくしていく。

しかしまた10分後に電車が来る。明達3人は最初にいた場所へ戻る。

明は忘れていた、屋根が無い。

明「あつ、あ、やべつ。」太陽が明に光の集中砲火を浴びせる。しかし一度行ったら戻れない。先のような事が起こらなければ。

明は後悔した。今一度、“後悔先に立たず”の意味を確りと噛み締めた瞬間でもあった。

客が少ないので駅を見渡すと、理佳が手首と手足の柔軟体操をしていた。しかし、その体操の効果を発揮するのはきつと仕事が終わってからだろうと明は思い、「バカだな・・・」と小声で呟いた。

明は独り言で「帰ったら何しようかな」と言った。すると理佳が近づいて、

理佳「じゃあわた」

明「やめとく」

理佳「まだ何も言っていないぞ」

明「5字言っただけでも大体分かる、『じゃあ私と寝る?』とか言い出すんだろ?」

理佳「あらま、そんな事考えてたの、明もやつとそんな時期か。」

明「私の思春期はとくに過ぎたのだが・・・。」

理佳「そう、思春期と言いたかったのだ。まあ、同じ事考えてたんだけどねえ」

明「何なんだよ」

理佳「だってぬいぐるみ無いと寝れないじゃん。『カプカプさん』の」



明「大きい声で言うなあ！」

理佳「じゃあ『カボつち』のぬいぐるみと一緒に寝てる事も？」

明「言っちゃダメ！」と小さく言いながらも、必死に止めようという感じである。

すると奈麻が

「そろそろ乗客来るから静に定位置に戻ったら？」と言った。

明、理佳「デジヤブってやつか。」と顔をあわせて言い、2人はおとなしく戻った。

## ホーム立碇（後書き）

以上です。

仕事中はギャグが少なめです。

まあギャグを入れてもギャクと言えるのか分からない不安なネタがありますが……。

自分なりということでも良しとしましょうか……？  
でもまだ続くので、お楽しみに？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3533v/>

---

バリ鉄ガール

2011年12月11日01時54分発行